

# SDGs × JISSEN

未来を動かす力を育てよう



# SDGs (持続可能な開発目標)とは?



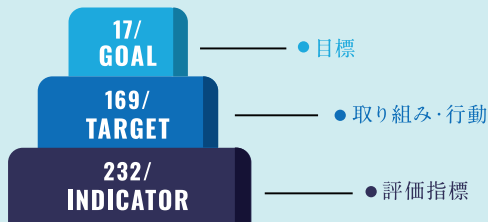
地球の環境を守り、世界の人々の命と暮らしを守ることを目的として2015年の国連サミットで「2030アジェンダ」として採択された持続可能な開発の目標です。地球上の誰一人として取り残さない (Leave No One Behind) ことを誓っています。いま世界各国が取り組んでいますが、いくつかの項目は2030年の達成が困難になっています。温暖化をはじめとして、貧困、飢餓、健康、教育、環境、ジェンダー、多様性と取り組まなければならない課題はたくさんあります。



## ▶SDGsの特徴

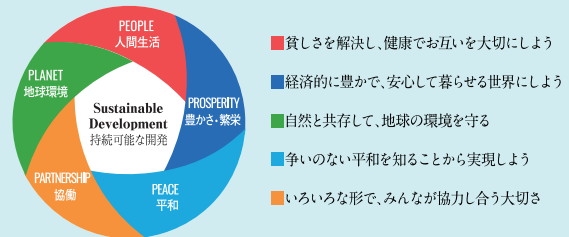
**1 Point** 17のゴール・169のターゲットから構成される

17のゴールと同じくらい169のターゲットも大切。持続可能な社会に向けて、具体的な取り組みや行動を定めています。



**2 Point** 「誰1人取り残さない」ことを採択時に宣誓

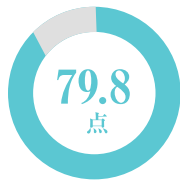
宣誓を実現するための指標として、5つのPの視点から17の開発目標を捉えることができます。



## ▶日本のSDGs達成度

**18** 位 / 165 国

世界ランキング

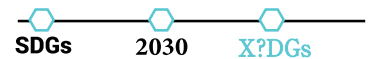


SDGs達成度スコア

出典:2021年6月発行「Sustainable Development Report 2021」

## ▶2030年を迎えた先にある社会

SDGsは2030年までの活動だととらえられがちですが、例えば、2050年にカーボンニュートラルにするための2030年までの目標であり、さらに2050年より先にはカーボンネガティブの実現を目指すなど、MDGs→SDGs→X?DGsと、アップデートしながら続けなければならない活動の一部であり、2030年はとても重要な分岐点になっています。世界には、人種、民族、戦争、難民など、SDGsにはあげられていない多くの問題も残されています。



## 学長メッセージ



実践女子大学  
実践女子大学短期大学部  
学長 難波 雅紀

本学では、SDGsの課題について積極的に向き合い、より良い社会の実現に貢献していきます。

本学は「女性が社会を変える、世界を変える」を建学の精神とし、社会を変革し未来を切り開いていく女性を育成することで、世界と地域に貢献することを目指しています。

2015年9月国連により定められた持続可能な開発目標 (SDGs) は、「地球上の誰一人として取り残さない」という考えのもと、世界を変革していく地球規模の課題であり、私達は深くその趣旨に賛同いたします。

本学では、SDGsの課題について積極的に向き合い、教育、研究、地域連携・社会連携、課外活動等による取り組みにより、より良い社会の実現に貢献していきます。



# あなたが **未来社会** を生きていくために とても大切な力を身につけます。



実践女子大学 生活科学部では、SDGsの課題に取り組むことで、  
社会で必要とされる「**課題解決力**」を養っていきます。



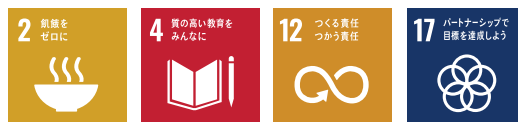
# SDGs REPORTS / 取り組み事例

## 01

食生活科学科 白尾美佳ゼミ(食品栄養学研究室)

### 地域における食育活動

地域の学校などにおいて、  
子どものための食育活動を行っています。



2005年に食育基本法が施行されましたが、日野市においても、すべての市民が健康に生き、心豊かな人生を歩み、それを次世代へ受け継ぐことを目的として、「日野市みんなで進める食育条例」が制定されています。この条例にもありますが、さまざまな食に関わる機関では、食育を推進する責務があり、特に、本学においては、地域における食育を推進することが期待されています。本ゼミでは、小学校、中学校、児童館などでの食育活動を行っています。小学校における食育活動では、子どもたちの実態、地域のニーズにあわせて自ら食育教材を作成して、学校給食前に実施しています。また、中学校のテーブルマナー教室での配膳支援や地域における地場産農作物を使った料理教室などの支援や食育なども行っています。さらに本学学祖、下田歌子の生誕地である岐阜県恵那市の小学校での食育、ファーマーズキッズフェアでは、食育ぬりえや六角返し、手洗い検査なども行いました。今後は、コロナウィルスの感染状況にあわせ、これまでの活動の継続と、新たな食育活動も展開したいと考えています。

## 02

食生活科学科 奈良一寛ゼミ(食品化学研究室)、佐藤幸子ゼミ(調理学第2研究室)、白尾美佳ゼミ(食品栄養学研究室)

### ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～

大学で行われている最先端の研究成果に触れ、  
科学の面白さを感じてもらおう体験プログラムです。



小学校5・6年生を対象に「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～in 実践女子大学」を開催しました。これは大学や研究機関で行われている最先端の研究成果について、直に見る、聞く、触れることで、科学の面白さを感じてもらおうための体験型プログラムです。本学では、科学と調理の関わりについて、体験を通して理解を深めてもらうプログラム「調理のふしぎは、科学のふしぎ!～『アビオス』って何?～」を実施しました。開講式に始まり、午前の講義では、「アビオス」がアメリカ先住民の栄養源であったとされること、また特徴や栽培方法について、さらには栽培に関連して、地球温暖化が作物に与える影響についても学習しました。午後からは白衣に着替え、「アビオス」を用いた化学実験、さらには調理実習では「アビオス」を材料に使用したチュロスを作り、食べ比べなども行いました。本学食生活科学科の在学学生も一緒に参加し、安全に実験・実習ができるようにサポートしました。修了式では、未来の科学者誕生を期待して「未来博士号」を子どもたち一人ひとりに授与しました。これからも、子どもたちに科学の面白さ、学びの楽しさを伝えていきたいと思っています。

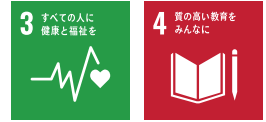


# 03

生活文化学科 長崎ゼミ(教育心理・発達支援学研究室)

## 障害児への発達支援プログラムの開発

自閉症児と知的障害児へのコミュニケーションや社会性の発達支援プログラムを開発しました。



自閉症児や知的障害児は、コミュニケーション・社会性の発達に障害や課題を抱えています。長崎ゼミでは、アサヒ飲料(株)の協力のもと、発達の基礎研究(田島ら、2014)に基づいた、7ステップの「カルピス」づくりを通したコミュニケーション・社会性の発達支援プログラムを開発。障害児を大学にお招きし、プログラムを実施、その効果について検討しています。(※1)また、運動・ゲーム、劇遊び、音楽活動などの包括的な発達支援プログラムを開発中。これらのプログラムは、単に障害児の個体発達を促すだけではなく、障害児に関わる保護者、友人、保育者、教員等が子どもとの関わり方の学びを支援するプログラムでもあります。応用として、実践女子大学の学園祭(常磐祭)で、「なかよしカフェ」を開催し、障害児が参加者に「カルピス」を振る舞う活動から、地域の方々・子どもたちが障害児を知り、関わり方を学ぶ機会としています。このような活動を通して、多様で、インクルーシブな社会の実現を目指します。これらの研究は文部科学省科学研究補助金(※2)を受け、学会発表等によって高い評価を得ています。ゼミで作成したパンフレット「広まれ!自閉症児のあれこれ-女子大生が自閉症児と出会った!」をKindleで発売中です。



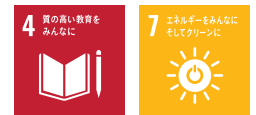
※1 ([https://www.jissen.ac.jp/society/research/join/join\\_4.html](https://www.jissen.ac.jp/society/research/join/join_4.html))に詳細と動画)  
 ※2 (2017-2019年度、2020-2022年度)

# 04

現代生活学科 菅野元行ゼミ(環境科学・エネルギー研究室)

## ゼミで「エコプロ」に出展in東京ビッグサイト

「エコプロ」に現代生活学科の環境・エネルギーゼミが出展しました!



環境・エネルギーゼミではエコキャンパスを目指してさまざまな環境・エネルギー領域の活動・研究を行っています。その1年間の成果を発表するために、東京ビッグサイトで毎年12月に開催される「エコプロ」に2018年からゼミで出展しています。具体的には、学内で多く排出されるペットボトルのキャップ、コンタクトレンズケースなどプラスチック製品の回収・リサイクルを行い、その効果的な回収方法やリサイクルの現状について説明しました。また、ゼミの1年間の取り組み内容を中心に大学の環境報告書を作成し配布。参加者の方々からアドバイスや質問も多くいただきました。「うちの会社、見学に来ない?」「うちの会社と一緒に取り組みませんか」など学内では決して得られない貴重な出会いが沢山あり、実際に企業の環境レポートの作成、他大学との共同研究にも発展しました。参加した学生はPricelessな経験になったと同時に充実感を口にしていました。2021年度も出展のため、さまざまな準備を行いました。環境・エネルギー領域は理科のみならず、地理、経済、社会にも関係し、現在の企業活動に重要な役割を果たしています。考えること、調べることが好きな人には向いている領域です。熱心に取り組みたい皆さんのご入学を心からお待ちしております!

# SDGs REPORTS / 取り組み事例

## 05 食生活科学科 白尾美佳ゼミ(食品栄養学研究室) 地域と連携した食農教育

地域と連携した食農教育を推進することで、  
緑豊かな街の維持・存続に協力しています。



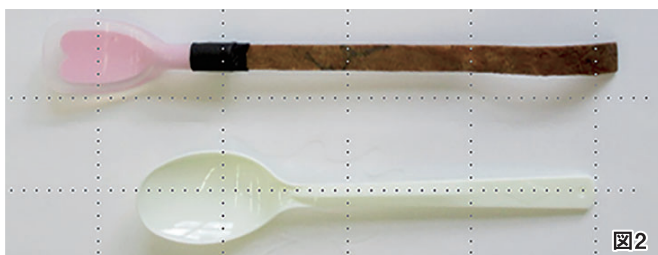
本学のキャンパスがある日野市は東京都にありながら都市農業が残る緑豊かな地域です。しかし、田畑が住宅地が変わっていき、昔あった畑が少なくなってきました。このように町が変貌する中、農家、自治会、ボランティアが協力しあって、農ある緑の街を維持継続しています。

また、日野市内の学校給食は、30年以上前から地産地消を実践しており、日野市の給食の特色にもなっています。本活動では、自治体、農家、地域自治会と連携して、食農教育を推進することで、食の生産過程を知る機会を得るとともに、地域農業の理解を深めています。

具体的には、日野市農家訪問、体験農業、自治会活動支援、「日野産大豆プロジェクト」への参加など、学童農園支援を行うとともに、学内でも農作物を作っています。昨年度は、コロナ禍にあり実施できなかった取り組みもありますが、特に、地域自治会支援では、さつまいも作りを支援するとともにレシピ集作成にも携わりました。これからも、多くの在学生に、積極的に参加してほしいと考えています。

## 06 人間生活科学研究所 佐藤健(人工学研究室)、加藤木秀章(材料科学研究室)、松岡康浩(食品産業研究室) SDGs対応の安心・安全な福祉用品の開発

生活科学部の3つの研究室がコラボ。プラスチックを使わない人間生活を創造するきっかけを探ります。



2020年7月1日からレジ袋が有料になりました。アツアツのコンビニ弁当を素手で運べるか?という身近な問題に、ハンカチにエコバックの形状・機能を付けるデザインを考案しました。エコバックというと大きな袋を想像しますが、ちょっとコンビニでお買い物する際の少量を一時的に運びやすいハンカチバックを開発・評価しました。プラスチックを極力使わないことが求められる社会の課題に対応して、グリーンコンポジット(植物由来)を利用した用品づくりに取り組んでいます。靴ソールに金属を使わない介護・看護者用のシューズとして、芯材をグリーンコンポジットで製作したナースサンダルを作りました(図1)。金属板を使ったシューズと遜色ない履き心地と歩行の可能性を評価しました。現在、グリーンコンポジットを応用した製品開発は世界的に注目されている分野です。スプーンの持ち手をグリーンコンポジット(図2)にして、ユニバーサルデザイン評価(UD)にSDGsとしての評価項目をいれて、将来のUDの在り方についても提唱しています。気候変動やマイクロプラスチック問題などを踏まえて、グリーンコンポジットを応用した生活用品が増えてきています。



# 07

現代生活学科 須賀由紀子ゼミ(地域・生活文化研究室)

## 地域価値発見まちあるきプロジェクト

SDGsを自分事として考えるまちあるきのプログラムを行い、地域を大事に思う人を増やします。



地域の皆さんと楽しくまちを歩きながら、地域のさまざまな魅力をSDGsの目線から捉え直し、これからの暮らしや地域づくりを自分事としていくプロジェクトです。特徴は、エシカル世代の大学生の目線を要に、高校生や市民、行政をつなぎ、若者主体でプログラム作りを行っていくことです。多様なものの見方を共有しながら、地域への関わり方を豊かにし、自分の世界を広げることができます。また、地域を愛する素敵な大人と一緒に活動できるので、人生のロールモデルに出会うことができます。コロナ禍だった2020年は、まちあるきに代わってSDGsのまちあるきのイベントマップの作成を行いました。日野の地域資源として価値のある地ビールや、子育てしやすいまちとしての魅力にふれることができるマップを作成し、オンラインで発表しました。その成果は日野市HPでも紹介されています。今後は、このマップを用いたまちあるきをさらに工夫し、場所を隔てて誰もが持続可能な地域づくりを考えることができる「ハイブリッド型SDGsまちあるき」のモデル化を目指します。地域の良さが深堀できるこのプロジェクトに参加すると、日野市という場所がどんどん好きになり、大学生活が楽しくなること間違いなしです。



# 08

まちの居場所研究所 須賀由紀子(地域・生活文化研究室)、橋弘志(空間デザイン研究室)、井口眞美(幼児教育研究室)、大澤朋子(社会福祉学研究室)

## まちの居場所づくりプロジェクト

地域の誰もが出入りし、憩いの場となる「まちの居場所」の仕掛けをつくり、住みやすいまちづくりを目指します。



少子高齢化が進む中、地域の居場所が求められている今日。若い学生の力で、地域の中で居場所の仕掛けづくりを行っています。この活動を通して、学生は地域の多様な世代の方々と出会い、豊かな暮らしと地域社会を考えることができます。そして設計やデザイン、コミュニティづくりなど、自分たちが専門的に学んでいることを地域の中で生かすことができます。これまで、主に日野市の地域ハブ施設である日野市カワセミハウスを活動拠点に、学生ならではの居場所プログラムを創出してきました。また、日野市内のどこに住んでいても歩いて行くことができる市内66か所の「地区センター」を実際に調べて編集した「地区センター図鑑」を刊行する等、日野市や地域の皆さんにお役立ていただいています。この図鑑制作には、日野市長から特別感謝状が贈られ、朝日新聞にも掲載されました。コロナ禍で、「人が集まってはいけない」のに「人が集まってこそ命が吹き込まれる」居場所づくりを考える、という矛盾した状況の中でも工夫を重ね、現在も取り組みを続けています。今後コロナウイルスが収束すれば、生活文化学科の子育て支援を考えるチームとも連携をしながら、さらに内容を生活科学部らしさで彩りたいと考えています。



撮影協力：現代生活学科 菅野元行ゼミ (左上)荒木 涼花さん (右上)石田 彩花さん (左下)川又 理乃さん (右下)松本 奈々さん

## 実践女子大学・生活科学部

<https://www.jissen.ac.jp>

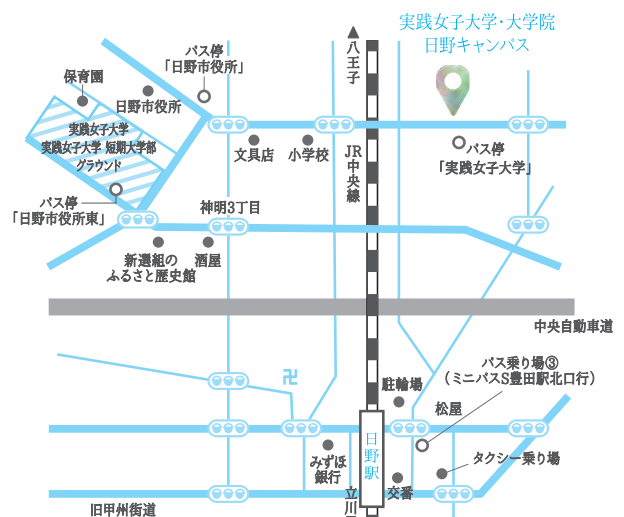
【お問合せ】学生総合支援センター 入学支援課

【日野】〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1 TEL 042-585-8820

【渋谷】〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49 TEL 03-6450-6820

### 生活科学部

- 食生活科学科 管理栄養士専攻/食物科学専攻/健康栄養専攻 ●生活環境学科
- 生活文化学科 生活心理専攻/幼児保育専攻 ●現代生活学科



Instagram  
@j\_staff\_jissen



LINE ID  
@jissen



実践女子大学  
SDGs取り組み事例

